

「仏教讃歌混声合唱団コール・スガンディ」について

仏教讃歌の概念を変え、新時代を予感させるスガンディのハーモニーは必聴です。

スガンディと言う名が、古代インド語サンスクリットで「よい香り」を意味するように、

仏の願いが香りとともにが拡散し広がっていくような、透明感あふれる倍音が複雑に揺らめく美しいアカペラです。

平成9年に発足し、数々のコンサートを開催、CD「香り立つ歌声」もリリース。

'12年9月に広島別院共命ホールでは、アトラライブとして聴衆を囲む立体音場での公演を開催。単なる合唱の域を超え、アートと宗教音楽を高い次元で融合するものでした。

2月8日の県立美術館ロビーでの公演は、縮景園庭園を借景に、コール・スガンディ委嘱作品・新実徳英作曲『金子みすゞの八つの歌』や、仏教音楽の進化系・牛尾孝慈作曲『新音楽礼拝』など、美しい声と光は、皆さんの心をしばし現世から離して浄化の道を見いだすきっかけとなることでしょう。

曲 目 紹 介

◆愛唱曲集（「幼き日の情景」増田順平 編曲）

♪ 雪

雪やこんこ あられやこんこ 降っては降っては ずんずん積もる
山も野原も わたぼうしかぶり 枯木残らず 花が咲く

雪やこんこ あられやこんこ 降っても降っても まだ降りやまぬ
犬は喜び 庭かけまわり 猫はこたつで丸くなる

♪ どのよっこふなっこ

春になれば すがこもどけて どのよっこだの ふなっこだの 夜が明けたと 思うべな

夏になれば わらしこ泳ぎ どのよっこだの ふなっこだの 鬼っこ来たなど 思うべな

秋になれば 木の葉こ落ちて どのよっこだの ふなっこだの 船っこ来たなど 思うべな

冬になれば すがこもはって どのよっこだの ふなっこだの てんじょこはったと 思うべな

♪ ふるさと

兎追いしかの山 小鮒釣りしかの川
夢は今もめぐりて 忘れがたき故郷

如何にいます父母 恙なしや友がき
雨に風につけても 思いいずる故郷

こころざしをはたして いつの日にか帰らん
山はあおき故郷 水は清き故郷

◆無伴奏混声合唱のための愛唱曲集『金子みすゞの八つのうた』 (新実徳英 作曲 コール・スガンディ 10周年記念委嘱作品)

金子みすゞさんは、明治36年に山口県長門市仙崎の書店、金子文英堂に生まれ、20歳頃から童謡詩を作り始め、その才能が認められて『赤い鳥』や『金の星』など、当時有名な雑誌に取り上げられました。

実は、みすゞさんは幼い頃からお寺に通い、仏教の教えに親しまれていたようで、その詩には仏さまの心をやさしい言葉で、見事に表現されています。特にいのちに対する深い眼差しは、仏教の壮大な世界観に裏付けられたものだったのです。

コール・スガンディでは、結成10周年を記念して、合唱曲の大家・新実徳英さんとのコラボレーションにより、無伴奏混声合唱のための愛唱曲集『金子みすゞの八つのうた』を委嘱しました。

みすゞさんの代表的な八つの詩を、豊かな解釈と重層的な音楽展開により、みすゞさんの詩の世界、心の動きが見事に表現されていて、具体的なイメージが沁み込んでくる名曲が生まれました。これまでに東京や京都、広島でも、様々な合唱団によって演奏されています。

今日はスガンディの演奏と共に、みすゞさんの詩の世界に、皆さんと一緒に入り込みたいと思います。

まず最初に、小学校の教科書にも出てくる代表作「私と小鳥と鈴と」をお聴き下さい。

♪ 私と小鳥と鈴と

私が両手をひろげても、
お空はちっとも飛べないが、
飛べる小鳥は私のように、
地面を速く走れない。
私が体をゆすっても、
きれいな音はでないけど、
あの鳴る鈴は私のように、
たくさんな唄は知らないよ。
鈴と、小鳥と、それから私、
みんなちがって、みんないい。

…他の生き物に対する視点

小学校の教科書にも取り上げられ有名な「私と小鳥と鈴と」。お空を飛べる小鳥と自分との違い、きれいな音を奏でる鈴と自分との違いに目を向け、それぞれの違いを認める温かい眼差しが歌われています。私達は、得てして「違い」を否定的なものとして考えます。人間関係でも、自分と意見が合う人、趣味が合う人、好みが似ている人とは仲良くし、意見が合わない人や自分と異質な人は、嫌い、付き合おうとしません。時には争い、傷つけ合うこともあります。

「仏説阿彌陀經」というお経に、「共命(ぐみょう)の鳥」という鳥が登場します。共命の鳥とは、シルクロードのキジ国の伝説上の鳥で、身体は一つで頭が2つある鳥のことで、争いの結果、身体が一つが故にお互いの命を奪い合ってしまうという悲しい鳥です。共命の鳥を通して、命の尊さと、私たちの煩惱に根ざした心の闇が照らされているのです。

みすゞさんの視点は、このような私達の心を言い当て、互いの違いを認め合いつつ、いのちの境界を乗り越えていく、大きな世界を示唆されています。

♪ 報恩講

「お番」の晩は雪のころ、
雪はなくても闇のころ。
くらい夜みちをお寺へつけば、
とても大きな蠟燭と、
とても大きなお火鉢で、
明るい、明るい、あたたかい。
大人はしっとりお話で、
子供は騒いじゃ叱られる。
だけど、明るくにぎやかで、
友だちやみんなよっていて、
なにかしないじゃいられない。
更けてお家にかへっても、
なにかうれしい、ねられない。
「お番」の晩は夜なかでも、
からころ足駄の音がする。

…報恩講、仏さまの願い

みずぶさんは、幼い頃、近くのお寺によくお参りされていたそうです。「報恩講」とは、浄土真宗を開かれた親鸞聖人のご命日に合わせて開かれてきた行事です。「お番」とは、仙崎地方で報恩講のことをあらわすそうです。ご命日は新暦で1月16日なのですが、その前の夜を「お逮夜」といいまして、昔は大人から子供まで村中の人々が集まり、夜通しお説教を聴かれていたそうです。この詩にはその賑やかな様子がありありとうたわれています。雪の降る厳しい寒さの中、仏さまのはたらきを表わす大きな蠟燭の灯りに照らされて、大きな火鉢の温もりの中。大人たちは法話に耳を傾け、その横で子供達がじっとしていられずに騒いで叱られる。それでも楽しい雰囲気、夜更けに家に帰っても寝られず、外を行き交う高下駄の音が気持ちよく響いている。昔は年に一度の一大イベントだったのでした。

みずぶさんの、温かく鋭い視点は、日ごろからお寺に親しみ、仏さまの願いが自然に身に沁み込む環境があつてのことだったのでした。

「さびしいとき」は、そんなみずぶさんが、仏さまの慈悲の心を見事に表現されています。自分がさびしい時に他人や友達が気にもかけない中、母親はやさしく受けとめてくれる。普通は仏さまの慈悲の心もそのように考えるものです。しかし母親といえど、違う命、自分の命と同じではありません。みずぶさんは、仏さまの命を、自分の命の中に届き、共に歩む命として受けとめていたのでしょう。

♪ もういいの

—もういいの。
—まあだだよ。
びわの木のたと、ぼたんのかげで、
かくれんぼうの子ども。
—もういいの。
—まあだだよ。
びわの木のえたと、青い実のなかで、
小鳥と、びわと。
—もういいの。
—まあだだよ。
お空のそとと、黒い土のなかで、
夏と、春と。

♪ さびしいとき

わたしがさびしいときに、
よその人は知らないの。
わたしがさびしいときに、
お友だちはわらうの。
わたしがさびしいときに、
お母さんはやさしいの。
わたしがさびしいときに、
ほどけさまはさびしいの。

…無機物、自然に対する視点

この詩は、木の枝や空、季節、土、水、影など、自然界の中で、普通は命がない無機物とされているものがテーマになっています。みずぶさんは、これらの中にも命を見出し、さらにそこから照らし出される自分の姿を見つめています。

経典の中にも、仏さまは虫や草木なども命として、全てを救うと説かれています。

現代は人間の命さえも物として扱う時代となっています。自分の都合に合うものは価値があり、自分の都合に合わないものは価値がない。役に立つものは利用し、役に立たないものは捨ててしまう。

どんな存在であっても、かけがえのない存在と受けとめる時に、その尊さに出会うことができます。それは人間同士はもちろんのこと、仏教では、一つの命が全ての存在につながり、全ての存在が一つの命につながっていると考えます。

「もういいの」は、ただの子供同士のカクレンボが、木々や鳥達のつながり、果ては大空と大地、季節の移り変わりにまで膨らみ、壮大な世界が表現されています。

◆新音楽礼拝（作曲：牛尾孝慈）

この『新音楽礼拝』は仏教讃歌混声合唱団コール・スガンドィの委嘱により、長年本願寺仏教音楽研究所にも携われYAMAHAのプロデューサーとしても活躍されてきた、安芸教区深川組光明寺ご住職の牛尾孝慈先生により作曲されたものです（構想4年、2010年11月完成）。

「三奉請～経段～念仏～和讃～回向句」という通常寺院でお勤めされる勤行次第の曲間に「念仏」が配置され、それがあたたかもプロムナードような効果をもって法要が展開して行きます。

また、経段部分に川上清吉作詩の「芬陀利華」（正信偈の意識）を用いるなど、随所に新しい試みがなされており、斬新な音楽礼拝のスタイルとなっています。

混声四部コーラスの透明感あふれるハーモニーに、仏教古来の声明や日本の伝統的な音楽エッセンスが織り込まれ、さらに斬新でユニークな要素が随所に光る、仏事法要としてはもちろん、世界に通じる宗教音楽として、また音楽作品としても、渾身の名曲が誕生しました。仏徳讃嘆の珠玉の言葉を貫き、魅力的な念仏のメロディーが、大いなる喚び声に乗せられ爽やかな涼風のように響きわたります。

①「念仏Ⅰ」

⑤「念仏Ⅲ」

②「三奉請」

奉請弥陀如来入道場散華樂
奉請釈迦如来入道場散華樂
奉請十方如来入道場散華樂

⑥「和讃」

無慚無愧のこの身にて
まことのこころはなけれども
弥陀の回向の御名なれば
功德は十方にみちたまふ

③「念仏Ⅱ」

⑦「念仏Ⅳ」

④「正信偈」（川上清吉作詞「芬陀利華」）

よしあしの 間をまよい
より処なき 凡夫すらや
みほとけの 誓いをきけば
おおいなる みむねをうけて
現世の にごりえに咲く
かぐわしき 芬陀利華かも
世のひとの うちにすぐれて
上もなき 人とたたえん
みほとけの かくこそは告れ

⑧「回向句」

願わくばこの功德を以って
平等に一切に施し
同じく菩提心を発して
安楽国に往生せ